

KYOTO ART CENTER

Annual Report 2021

KYOTO ART CENTER
Annual Report 2021



理念

Mission

京都芸術センターは、京都市、芸術家、その他芸術に関する活動を行う者が連携し、京都市における芸術の総合的な振興を目指して2000年4月に開設しました。その活動の特徴として、「ジャンルを問わない若い世代の芸術家の制作活動の支援」「さまざまなメディアを用いた、芸術文化に関する情報の収集と発信」「芸術家と市民あるいは芸術家相互の交流の促進」の3つがあげられます。具体的な事業として、展覧会、音楽・演劇・ダンス・伝統芸能などの舞台公演、さまざまなワークショップや芸術家・芸術関係者の発掘と育成のほか、制作や練習の場である「制作室」の提供、アーティスト・イン・レジデンスプログラムでの国内外の芸術家の支援などを実施しています。このような活動をとおして、京都芸術センターは、新しい芸術と都市文化の創造拠点となることを目指しています。

KYOTO ART CENTER was established in April 2000 in a hope to promote arts in Kyoto in a comprehensive way by collaboration between the city of Kyoto, artists and other people related to art. Kyoto Art Center focuses on the following three points: to support young artists in their activities regardless of genre, to collect and disseminate information on arts and culture using various media, to promote communication between artists and citizens, and among artists. Our activities include exhibitions, concerts, dance performances, theater, traditional stage performance and various kinds of workshops for training artists and other people related to art, hosting innovative projects for the conservation of traditional arts and creating new ones. We also provide artists from home and abroad studio spaces and Artist in Residence program. Through such services and activities, the center is hoping to become the focal point of the city culture in the new era.

目次

巻頭特集 北爪裕道インタビュー	03
活動センター機能	07
情報センター機能	35
交流センター機能	39
受託事業	46
組織体制	48

明倫茶会 / 伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス (TARO) / KAC Performing Arts Program / 京都国際ダンスワークショップフェスティバル
トラディショナル・シアター・トレーニング / KYOTO EXPERIMENT / 展覧会 / 跳ぶ前に聞け！ / ニュイ・ブランシュ / KYOTO STEAM / 制作支援事業
Co-program / KIPPU / 図書室・情報コーナー / 京都芸術センター通信紙 / KYOTO ART BOX / アーティスト・イン・レジデンスプログラム
明倫レコード倶楽部 / 明倫ワークショップ / ボランティアスタッフ / 京都文化芸術コア・ネットワーク



巻頭特集

Kitazume Hiromichi Interview

インタビュー：佐野晶子（京都芸術センタープログラムディレクター）
文・編集：小山文加（音楽文化研究者）
撮影：守屋友樹（P. 3、P. 4）

KAC Performing Arts Program 2021/ Music #1

北爪裕道『粒子の踊り』

京都芸術センター（以下、KAC）が企画制作する公演事業 “KAC Performing Arts Program”。
2021年度、“Music”シリーズとして取り上げたのは、現代音楽の気鋭の作曲家である北爪裕道氏、坂東祐大氏、安野太郎氏の3名でした。
本稿では、第一弾として登場した北爪裕道氏に、『粒子の踊り』公演の制作プロセスや作曲についての考えなどをお聞きました。

＊『粒子の踊り』の詳細については、P12をご覧ください。

すべての瞬間に意味があるように

暗闇の中を飛び交う光と音響。それは楽器を巧みに操る人間による演奏なのか、人工的に生成された電子音なのか、あるいはそのどちらでもなく、それらを超越した何かなのか——北爪裕道氏が作曲・構成した『粒子の踊り』では、人々の感性が研ぎ澄まされる濃密な空間が立ち現れました。

楽器製作の原点、音楽の根源への興味

——『粒子の踊り』の会場となったKACの講堂には、さまざまな自動演奏楽器や音響装置が配置されました。作曲家として自ら楽器や装置まで製作する、そのスタイルはどのように育まれたのでしょうか。

北爪 まず、僕には兄が2人いるのですが、兄弟3人とも工作や機械いじりが好きなんです。昔からいろいろな工具や材料が家中に転がっていて、何か必要になったら自分で作るのが自然な流れ。コンピュータでのプログラミングもしていましたから、今回も自動演奏の仕組みが欲しいと思ったらすぐ形にできたんです。

打楽器については、とにかくいい音が鳴る材料を探し回ります。今回の金属パイプもホームセンターで見繕ったものです。必要な長さを計算しつつ切断し、叩いてみてさらに調整を繰り返しました。今までにも、欲しい音やアイデアが浮かぶたびにいろいろ試してきました。

——音による表現、作曲というものを強く意識し始めたのはいつ頃だったのでしょうか。

北爪 一つのきっかけは中学時代にあったと思います。兄2人は全然タイプも違いますが各々いろんなことに精通していて、僕は小さい頃から彼らのハマっていることを都度覗いたり共有したりしてきました。音楽もそのうちの一つだったんです。

中学生の頃、兄の一人が高校でオーケストラをやったり、音楽家の祖父と楽しそうによく音楽の話をしていました。それに触発されて、僕もいろいろな曲や演奏を聴きまくり、幼少期から続けていたピアノも熱を入れてさらい始めました。オーケストラ・スコアも次々に読みあさって、自分だったらどういう風に解釈して演奏をつくるかを指揮者のように研究して考えるのが日常の趣味になりました。

そのうち、音楽を聴いて感動する、その大元はやはり作曲家の仕事によるところが大きいだろうと思うようになり、藝大の作曲科へいくことにしたんです。ただ作曲を仕事にするかどうかはあまり考えておらず、院試を控えていた時期には指揮専攻へ進学する準備をしていました。でもその頃ちょうど、今後新たに作曲してみたいものの方向性が見えてきたんですね。それでもう少し作曲を続けたいと思い直しました。メディアアートなどに強く傾倒するようになったのもその頃です。今回KACでやらせていただいたものは、まさにその延長にありました。

空間と時間を共有して体験することの意味を、根本から考えたい

——今や北爪さんの作品は国内外で演奏されていますが、KACというオルタナティブ・スペースでの創作・上演を体験していかがでしたか。

北爪 クラシック音楽のコンサートの場合、たいていはフォーマットがあらかじめ設定されていますよね。客席の前には舞台がある。そこへ演奏家が出てきて曲を弾き、終わったら拍手を浴び、お辞儀をして退場する。

でもクリエーションをするからには、そういうところもゼロから考えたいという欲求が僕には昔からありました。空間と時間を共有して体験すること。その意味を、根本的なところから考えるべきだと。今回KACでは空間全体を使って自由にやってくださいと言っていただし、まさに僕がやりたいと思っていたことを実践できると感じ、公演形式や会場づくりから考えさせていただきました。また、ぜひ空間芸術や演出の方々の目も入れて協働したいと思い、専門家をご紹介いただきました。

KACは音響的にも視覚的にもつくりがいがあり、創作のプロセスは



とても充実していました。桑折現さん(演出)や十河陽平さん(照明)が特に最初期の概要や方向性を調整するところから付き合ってください、僕のプランや意向をとて尊重しながらも、テクニカルな視点も含めいろいろな可能性を考えてくださいました。そのやり取りの中でアイディアを膨らませたり、逆に要素を削って目的を絞ったりと、時間をかけて揉みながら具体化し定まっていきました。大変幸せな経験でした。何度も行われたミーティングでは毎回議論が尽きず、何時間にも及びました。制作の方々も含め皆さん積極的に時間を割いて参加していただき、愛を感じずにはいられませんでした。本当に舞台芸術がお好きなんだな、好きでやっていらっしゃるし、やってくださっているんだなと。そしてその情熱は現場に素晴らしいクオリティで結晶しました。

有機的か無機的か

——本公演のために制作された《自動演奏打楽器群による前奏曲》には大変感動しました。自動演奏ピアノからは人間では演奏不可能な超絶的な音が鳴り響き、舞台奥から客席上まで螺旋を描くように設置された自動演奏打楽器からはきらめくチャイムのような音が頭上からふり注ぎ、神の存在さえ思わされました。生身の人間と機械との関係をどのようにとらえていますか。

北爪 電子音響を使うとき、スピーカーで客席の周りを囲うタイプの音響的なデザインは比較的好くみられます。でも、今回は客席にいる観客の間を音が縦断するものが欲しかった。それもスピーカーから出る音ではなくアコースティックの自動演奏楽器を使うことで、より存在感のある音が、光を伴って観客の眼前を駆け抜けます。さらにその動きが舞台中央の自動演奏ピアノまでつながる。このようなダイナミックな音響的・視覚的な拡張が、あの装置を製作した意図でした。

自動演奏の楽器を使うもう一つのモチベーションは、人間とは別の摂理で動く機械制御ならではの演奏効果です。このテーマには音楽的にさまざまな角度から切り込んでいます。

機械のような“無機的”な表現と、人間らしい“有機的”な表現との特徴というのも、僕が長年意識し実践してきたテーマの一つです。ここで注意すべきは、本来の機械がそのまま見せる挙動と、鑑賞者にとって機械っぽく聞こえる表現は別だということですね。それっぽくするにはその特徴を捉えて少し強調しないといけな。気の利いた似顔絵がリアルに描いた絵よりも対象の特徴をよく語る場合に近いと思います。



自動演奏ピアノの開発者の方から、こんなご感想をいただいたことがあります。我々はいかに人間のピアノ演奏に近付けるかを追求しているけれど、北爪さんはそうではなく自動演奏ピアノだからできることを探求していて大変興味深いと。同じように、例えば人間を模したロボットの開発はいかに有機的でしなやかな動きを作るかを追求してきたと思うんですが、一方で「ロボットダンス」のように人間が関節の動きを限定し、あえてのぎこちない動きによってロボットらしく見せるという例があります。前者をハイテク志向とするなら、後者はローテク志向とでも言えるかもしれませんが。そして僕が創作上フォーカスするのは後者の方です。何をもって機械らしく・非人間らしく感じられるのかということに興味をもってきました。

人間の感性に直接響く、人の心をつかんで離さない圧倒的な音楽を

——電子音響やコンピュータ音楽を学んできた北爪さんがローテク志向であるというところから逆説的に生み出される新しさに衝撃を受ける方は多いと思います。現代音楽の分野ではさまざまなテクノロジーが用いられていますが、そもそも“現代音楽”とは何か、その定義は可能なののでしょうか。

北爪 質問の答えになるかはわかりませんが、自分がどういうスタンスを取ってきたかと言えば、現代音楽は“何でもあり”だということです。例えばバロック、古典派、ロマン派の音楽ならばそれぞれこういう感じの音楽で……とある程度説明できますが、20世紀以降の音楽は多種

12部屋ある制作室の貸し出しを通して、創作場所の提供を行う制作支援事業を軸に、ジャンルにとらわれず、主に若い世代の芸術家の制作活動の支援を行っています。企画展やプロデュース公演での発表の機会の提供だけでなく、京都国際ダンスワークショップフェスティバルやトラディショナル・シアター・トレーニングでの人材育成、Co-programでの伴走型協働など、多様な側面から芸術家の活動を支援しています。

多様過ぎて、内容的に簡単に一括りにできるものではないんですね。だから、現代音楽だからこうあるべきというような固定観念はもたないようになっています。

現代音楽は限られた玄人にしかわからないという批判は昔からありますが、僕は人間の感性に直接響くようなものをいつも目指しています。音楽って抽象的な芸術じゃないですか。それを聴いている人に“わかって”もらうために、具体的なストーリーなどを提示するというのは比較的によくある手だと思うんですね。劇伴音楽もそうですが、何か抛り所があると、割とわかったように感じてもらえる。でもそういうものがなくても、単純に音の現象やエネルギーの変化、推移——、そういうものの成り行きに説得力があれば、あるいは音自体に魅力があれば、それだけで人の感性にじゅうぶん響くと思うんです。そのくらい強いものを、人の心をつかんで離さないようなものを作りたい。すべての瞬間に意味があるようにしたいんですね。だから、聴いている人の心理を常に考え

るようにしています。そしてその受け取り方は聴く人によって違っていいと思うんです。

テクノロジーの用いられ方もさまざまですが、今回の主たる制作スタイルはとても手間がかかります。一般的な器楽曲の場合、楽譜を書いて渡し、あとは演奏者の音楽性にまかせることもできる訳ですが、今回の機械制御の演奏では、その演奏表現の部分も精緻に作り込んでいます。もちろんコンピュータ音楽でもざっくり作る方法はいろいろありますが、僕はそこも手作業で完璧に磨き上げたい。その作業には、昔から演奏表現にこだわりながら継続してきた楽器演奏、指揮、作曲、音響技術などのあらゆる経験と知見が生きています。

個人的には、聴いている人を圧倒したいという欲求もあります。「あ、この曲知ってる」という楽しみ方ではなく、人々がそれまで知らなかったものに圧倒されたり感動したりすることを目指す。それが目標です。僕自身もそういう作品に出会いたいし、そういうものを作っていきたいです。



第153回 明倫茶会『舞踏茶会～エロスのために』

Meirin Tea Ceremony “Butoh Tea Ceremony –for Eros–”

2021年10月30日 12:00/14:00/16:00 席主:小林昌廣

October 30, 2021, 12:00/14:00/16:00 Host: Kobayashi Masahiro



Photo by Mimura Hiroshi

席主の揮毫による掛け軸、土方巽のポートレート、そして二輪の花。席主を務めた小林昌廣が「舞踏と茶の湯は似ている、と思う」や「茶の湯も舞踏もその場で起こっていることを参加しつつ客観視することが大切なのである」と語ったとおり、この茶会では、今貂子の舞踏と長唄の三味線奏者ユニットのおかえり姉妹の演奏、菓子作家である椿野うららの菓子、そして小林の話によって、茶の湯と舞踏が交差する時空間が作られた。[会場: 京都芸術センター 大広間／参加者数:31名]

席主:小林昌廣

舞踏:今貂子

三味線:おかえり姉妹

お菓子:椿野うらら

小林昌廣 Kobayashi Masahiro

情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) 教授。医学と哲学と芸術を三つの頂点とする三角形の中心に「身体」をすえて、独特の身体論を展開。医学史・医療人類学から見た身体、古典芸能（歌舞伎、文楽、能楽、落語）から見た身体、そして現代思想とくに表象文化論から見た身体などについて横断的に考察している。各地で歌舞伎や落語に関する市民講座や公開講座などを行っている。

第154回 明倫茶会『カレンデュラ』

Meirin Tea Ceremony “Calendula”

2022年2月26日 13:00/16:00/19:00

席主:ハラサオリ

February 26, 2022, 13:00/16:00/19:00

Host: Hala Saori



Photo by comuramai

『カレンデュラ』では、千利休によって茶席で避けるべきとされた「禁花」をとりあげ、ダンスと茶の湯をかけあわせた茶会を開催。オーディションを経て選出されたダンサーを茶花に見立て、振付家・ダンサーのハラサオリ独自のおもてなしを楽しむ会となった。[会場: 京都芸術センター 講堂／参加者数:121名]

席主:ハラサオリ

茶花:小倉笑、斉藤綾子、杉浦ゆら、辻井一朗、ヒグチアオイ

音楽監修・演奏:小田朋美

茶トウルク (茶事アドバイザー):マイケル・ハーディ

宣伝美術:石塚俊

ハラサオリ Hala Saori

振付家、ダンサー、美術家、Dance Base Yokohama レジデンスコレオグラファー。ベルリン、東京、横浜など複数の都市を拠点に、空間と身体、身体の帰属をテーマとしたパフォーマンスや振付作品を制作する。デザイン、生態心理学などのバックグラウンドや、幼少から続く自然災害との共生経験から「環境に動かされる身体」に着目したムーブメントリサーチを継続している。東京藝術大学美術研究科デザイン専攻修士課程修了、ベルリン芸術大学舞踊科ソロパフォーマンス学科修士課程修了。2020-2021年度アーツコミッション・ヨコハマU39アーティスト・フェローシップ。

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス (TARO)

Traditional Arts Archive & Research Office



「新素材による鉦すりの試作と生産業者の探索」事業の様子



「ほっこり民俗芸能オンライン・フェスティバル」撮影の様子

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス (TARO) は、伝統芸能の継承と創造を推進する事務局として、2017年に京都芸術センター内に設置された。伝統芸能の継承や保存、用具・用品とその材料の確保、普及・創造・発信活動など、伝統芸能文化の総合的な活性化の観点から、ネットワークの構築や基礎調査等を進めている。

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィスウェブサイト
<http://www.traditional-arts.org/>

〔2021年度の取り組み〕

伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム

伝統芸能文化に用いられる楽器・用具用品の復元や、古典芸能・民俗芸能の活性化を目的に、次の6つの事業を実施した。「十津川盆踊りの伝承・保存・活用発信」、「新素材による鉦すりの試作と生産業者の探索（祇園祭・新素材による鉦すりお披露目会）」、「見島のカセドリ養蚕製作技術の確保計画」、「古物重厚意匠糊地能楽扇の写し製作」、「笛譜・唱歌制作による石見神楽の継承円滑化事業」、「三味線音楽のScratch教材開発：常磐津節を通じて日本の伝統芸能に親しむための教育プログラムづくりとその普及の試み」。

ほっこり民俗芸能オンライン・フェスティバル～ユースの部から

京都、滋賀、大阪それぞれの地域における民俗芸能の次世代を担うユース世代の活躍に焦点をあて、YouTubeにて動画配信を行った。

出演：嵯峨こども念佛狂言（京都）、富田人形共遊団ジュニアクラス（滋賀）、交野ヶ原交野節・おどり保存会（大阪）

コロナ禍における無形民俗文化財のための継承・保存・活性化の相談窓口、デジタル配信のサポート

＊文化庁「令和2年度補正予算地域文化財総合活用推進事業（地域無形文化遺産継承のための新しい生活様式支援事業）」

民俗芸能において、映像配信に関する相談窓口を設置し、デジタル配信のサポートを行った。また映像配信に意欲的な京都の5団体に密着し、2021年度の取り組みや実情を紹介する動画（英語字幕付）を6本作成し、YouTubeで配信した。「上鳥羽六斎念仏の子どもたち～ある日の練習風景～」、「祇園祭ドキュメント2021 南観音山の夏～聴こえてきた巡行の光～」、「山間に揺らめく燈～2021年八瀬赦免地踊りの中止をめぐって～」、「粟田祭の剣鉦差し2021」、「京都の大晦日の伝統行事2021」。

合田団地『リゾート（なかった青春の末路としての）』

Goda Danchi “Resort”

2021年9月25日、26日 各日14:00/18:00
 September 25 and 26, 2021 14:00/18:00



Photo by Maetani Kai

劇作家、演出家の合田団地による新作公演を上演。これまで、一对一の会話や小さな人間関係を取りあげ、その背景に社会構造が透けて浮かぶような作品を多く創作してきた合田。本作では、様々な変化に晒されるなか、それでも変わらない／変わらない自分自身や目の前の人との関係に焦点をあてた。[会場：京都芸術センター フリースペース／鑑賞者数：164名]

作・演出：合田団地

出演：岩越信之介、尾形柚香、澤田誠、夏井菜月

照明：渡辺佳奈

音響：森永恭代

舞台監督：長峯巧弥

メインビジュアル：MISSISSIPPI

フライヤーデザイン：関川航平

協力：努力クラブ、舞夢プロ

助成：芸術文化振興基金

合田団地 Goda Danchi

努力クラブ代表。作家、演出家、たまに役者。1987年生まれ。高校時代、演劇部に入学したことを機に演劇を始め、佛教大学劇団紫を経て、2011年佐々木峻一とともに努力クラブを結成。以降、京都を中心に活動する。

北爪裕道『粒子の踊り』

Kitazume Hiromichi “Danse d’atomes”

2021年12月11日、12日 両日15:00 / December 11 and 12, 2021 15:00



Photo by Moriya Yuki (右2枚)

器楽に加え、電子音響や自動演奏ピアノを用いた曲も多く手掛けている作曲家、北爪裕道の公演。人間の演奏とは別の摂理で動く自動演奏ならではの表現を追求してきた北爪は、今回、アコースティック演奏や自動演奏楽器など異なる音次元が時間的・空間的にどう存在し表現されるのか、照明などの舞台演出も含めて舞台上に展開しました。[会場:京都芸術センター 講堂／鑑賞者数:99名]

作曲・構成:北爪裕道
出演:本堂誠 (サクソフォン)、猪居謙 (ギター)、加藤文枝 (チェロ)
演出協力:桑折現 技術協力:大久保雅基 舞台監督:小林勇陽
照明:十河陽平 (RYU) 音響プラン:大久保歩 (KWAT)

助成:芸術文化振興基金

北爪裕道 Kitazume Hiromichi
東京藝術大学、桐朋学園大学などで作曲や指揮を学んだ後、文化庁、ロームミュージックファンデーションなどから給費を得てパリに滞在。パリ国立高等音楽院作曲科第一、第二課程、IRCAM (フランス国立音響音楽研究所) コンピュータ音楽課程をすべて首席で入学および修了。作品はソロからオーケストラ、声楽、電子音楽など多岐にわたり、世界各地で高い評価を受けている。また指揮者としても国内外の新作初演等を多数手がけてきたほか、電子音響、コンピュータ音楽技術も手がけ、独自の演奏装置やシステム制作も行う。2018年、自動演奏ピアノや電子音響を駆使したオーケストラ作品がパリで初演、翌年、東京サントリーホールでも上演され、それぞれ話題を集めた。現在、東京藝術大学、桐朋学園大学、国立音楽大学などで講師を務める。

坂東祐大『耳と、目と、毒を使って』

Bandoh Yuta “with Ears, Eyes, and Poison”

2022年3月13日 13:30/17:30
March 13, 2022 13:30/17:30



Photo by Saeki Shinryo

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で2020年3月から延期となり開催された。前衛音楽の潮流を感じさせ、観客の視聴体験にまで踏み込んだ作品などジャンルを横断して活動を展開してきた坂東祐大の楽曲は「毒」を想起させると評される。本公演は、その坂東が楽音のみならず、映像や身振り、声といった視覚的・非音楽的要素を織り込み作り上げたもので、オンライン上で展開する舞台作品が急増した昨今の状況のなかで、あらためて演者と観客が同じ時間の中で「音楽」を体験する意義を提示するものとなった。[会場: 京都芸術センター 講堂／鑑賞者数:169名]

作曲・構成:坂東祐大
出演:多久潤一朗 (フルート)、東紗衣 (クラリネット)、
大家一将 (パーカッション)、LEO (箏)、前久保諒 (キーボード)、
矢部華恵 (声)、有馬純寿 (エレクトロニクス)
テキストキュレーション:文月悠光
舞台監督:十河陽平 (RYU)
照明:葭田野浩介 (RYU)
音響設営:KWAT

助成:芸術文化振興基金

坂東祐大 Bandoh Yuta
作曲家、音楽家。1991年生まれ。東京藝術大学作曲科を首席で卒業。同大学院音楽研究科作曲専攻修士課程修了。様式を横断したハイブリッドな文脈操作、サンプリングなどを駆使し、多岐にわたって創作活動を行う。第25 回芥川作曲賞受賞(2015年)。2016年、Ensemble FOVEを設立。代表として気鋭のメンバーと共にジャンルの枠を拡張する、様々なアートプロジェクトを展開している。

安野太郎『ゾンビ音楽「大霊廟Ⅲ」 —サークル・オブ・ライフ—』

Yasuno Taro “ZOMBIE MUSIC The Mausoleum III—Circle of Life”

2022年3月26日19:00、27日14:00
March 26 19:00 and 27 14:00, 2022

作曲家の安野太郎による音楽プロジェクト「ゾンビ音楽」の新作公演。音楽家のエコシステム（生態系）をテーマとした本公演では、様々な立場で音楽と関わる人々へのアンケートやインタビューによる取材の成果を踏まえ制作された新作と安野の旧作を、高さ4mの演奏装置等を用いて上演した。
[会場:京都芸術センター 講堂／鑑賞者数:161名]

作曲:安野太郎
出演:今井貴子、清水慶彦、安野太郎、和田悠花
映像・演出補:小野寺啓
舞台監督:渡部景介
照明:十河陽平 (RYU)
宣伝美術:松見拓也
音響設営:KWAT
設営協力:杉野智彦

助成:芸術文化振興基金、公益財団法人日本学術振興財団研究助成金、サントリー芸術財団推薦公演

安野太郎 Yasuno Taro
作曲家。1979年生まれ。東京音楽大学作曲科卒業。情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) 修了。現在、愛知県立芸術大学准教授。日本人の父とブラジル人の母を持つ。いわゆるDTMやエレクトロサウンドとしてのコンピューター・ミュージックとは異なる軸で、テクノロジーと向き合う音楽を作っている。代表作に『音楽映画』シリーズ、『サーチエンジン』、自作自動演奏機械の演奏による『ゾンビ音楽』シリーズ。近年の活動に「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」参加 (2021)、個展「安野太郎:アンリアライズド・コンポジション『アイコン2020-2025』」(アートフロントギャラリー ,2020),『Cosmo-Eggs|宇宙の卵』(第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館代表作家チームとして、2019)等。

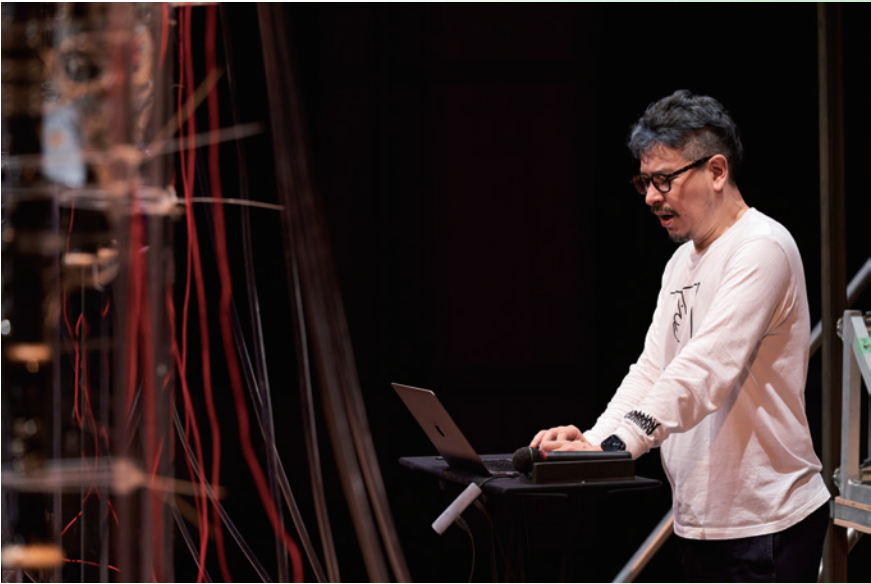
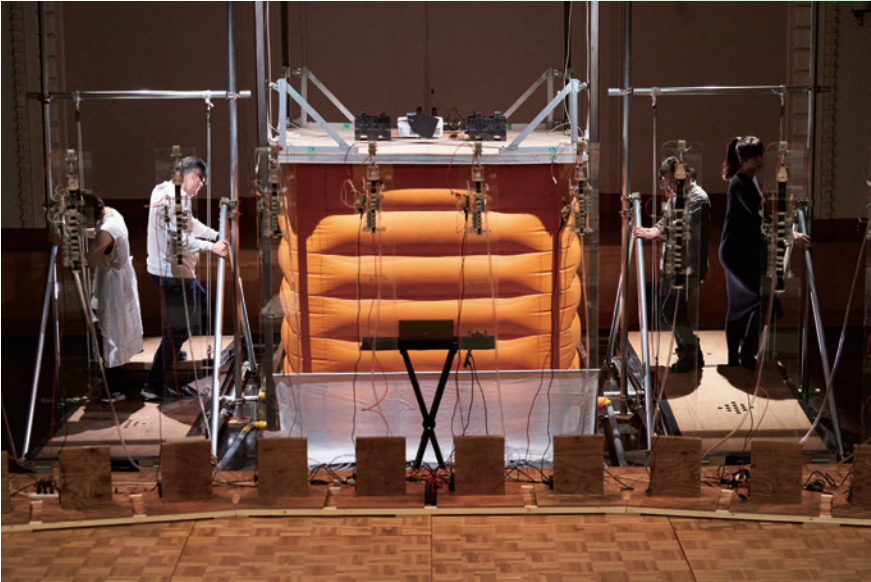
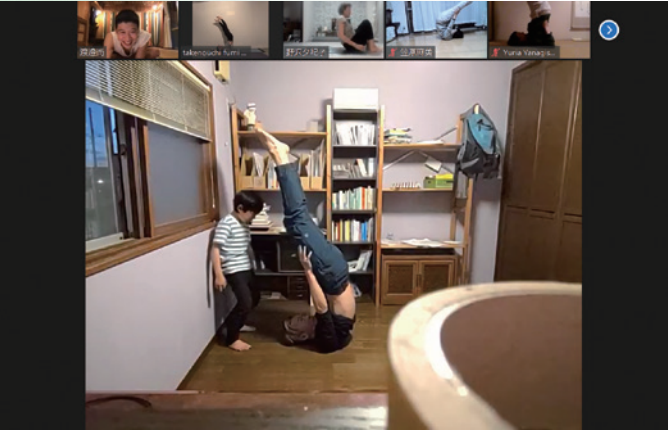


Photo by Matsumi Takuya

京都国際ダンスワークショップフェスティバル 2021

Kyoto International Dance Workshop Festival 2021

2021年4月26日ー5月5日 (オンライン) / April 26–May 5, 2021



若手ダンサーの育成を目指し、国内外で活躍する振付家、ダンサーを講師に招いた国内最大級のダンスワークショップフェスティバル。「EXISDANCE」をテーマに、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、すべてのコースをオンラインに変更した上でフェスティバルを開催し、オンラインでの交流会などを実施した。

[開講クラス]
アマンダ・ミラー『Embracing our Body and Mind 心と身体を抱きしめて』
児玉北斗『グレー・ゾーンで踊るワークショップ』
カティア・ムストネン『即興からフレーズへ』
島田櫻『Re-imagining yourself:自分自身への再考』
渡邊尚『緩みながらもバランスを維持する身体』
山田知世 (アシスタント:カーター詩音)『英語のアーティストバイオ・ステートメントを作成しよう』
秋津さやか『こどもと大人』

京都国際ダンスワークショップフェスティバル25周年記念公演「SHARE」
日時:4月23日 18:00 24日 13:00/17:00
第一部 振付:チョン・ヨンドゥ 出演:寺田みさこ、森裕子
第二部 振付:カティア・ムストネン 出演:大前光市、服部哲郎、村上渉、杉本音音、森井淳、林南々帆、辻本佳、遠藤リョウノスケ、小倉笑

主催:京都芸術センター (公益財団法人京都市芸術文化協会)、一般社団法人ダンスアンドエンヴァイロメント
協賛:AIR SPENSER
協力:VIADANSE

バーチャルT.T.T.

Virtual T.T.T.

2021年8月10日ー継続 / August 10, 2021ー



新型コロナウイルス感染症による渡航制限により、日本の伝統芸能を学びたい国内外の研究者・芸術家向けに開催しているトラディショナル・シアター・トレーニングは2020年度に続き中止としたが、自宅で日本の伝統芸能を学ぶ機会を提供するため、能・狂言・日本舞踊の各分野のワークショップ動画を英語字幕を入れて制作し、公開した。

プログラムディレクター:マシュー・ショアーズ

〔能〕

#1 「能の装束」出演:片山伸吾、大江信行、田茂井廣道
https://youtu.be/34YMDDWbM3U



#2 「能の髪結いと実演」出演:片山伸吾、大江信行、田茂井廣道
https://youtu.be/VIXy6VGpXUg



〔狂言〕

#1 狂言「しびり」出演:茂山あきら、茂山千之丞
https://youtu.be/J21Ake4dJH0



#2 「狂言のことばと動き」出演:茂山あきら、茂山千之丞
https://youtu.be/ljp0m6xFhj0



〔日本舞踊〕

#1 「日本舞踊の所作」出演:若柳弥生、若柳弥天
https://youtu.be/AcsFHUupb2A



#2 「日本舞踊の小道具」出演:若柳弥生、若柳弥天
https://youtu.be/zpqFfBQ9FAc



共催:国際交流基金京都支部

KYOTO EXPERIMENT 2021 京都国際舞台芸術祭 AUTUMN

KYOTO EXPERIMENT 2021 Kyoto International Performing Arts Festival AUTUMN

2021年10月1日ー10月24日 / October 1ーOctober 24, 2021



Photo by Sawada Hana, Courtesy of Kyoto Experiment

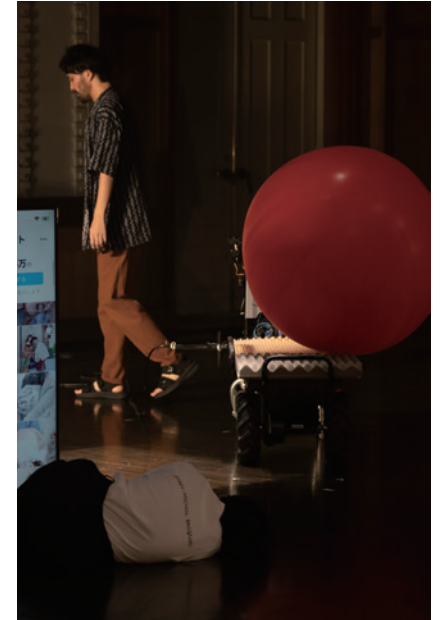


Photo by Shirai Akane, Courtesy of Kyoto Experiment

「もしもし?！」をテーマに、11のプログラムからなる「Shows」、実験的な舞台芸術作品と社会を対話やワークショップをつなぐ「Super Knowledge for the Future [SKF]」、京都発の国際フェスティバルとして、自分たちが立脚する「地域」について自覚的に捉え、フィールドワークを通して探求するKansai Studiesの3つで構成されたKYOTO EXPERIMENT。京都芸術センターでは、以下のプログラムを実施。

〔京都芸術センターで実施したプログラム〕

ホー・ツーニエン『ヴォイス・オブ・ヴォイド ー虚無の声 YCAMとのコラボレーション』10月1日ー24日

和田ながらxやんツ『擬婉』10月16日・17日

鉄割アルバトロケット『鉄都割京です』10月22日ー24日

Super Knowledge for the Future [SKF]

1. 「ヴォイス・オブ・ヴォイド展 トークシリーズ」
・アーティスト・トーク 10月3日
・身体論的にひもとく西田哲学について 10月9日
2. 「性教育のいま」 10月17日

Kansai Studies 10月9日ー24日

主催:京都国際舞台芸術祭実行委員会〔京都市、ロームシアター京都（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、京都芸術大学 舞台芸術研究センター、THEATRE E9 KYOTO（一般社団法人アーツシード京都）〕

ニューミュレーション#4 小嶋晶・小林椋

New Mutation #4 Kojima Aki + Kobayashi Muku

2021年6月26日－8月22日 / June 26–August 22, 2021



Photo by Matsumi Takuya

わたしたちの日常生活を形づくる、小さな仕組みの組み合わせの裏側には、選択されなかった構成要素やシステムがいくつも存在する。本展では、小嶋晶と小林椋の、既存の構造から未知の仕組みを生み出す過程に注目し、彼ら独自の「ありえたかもしれない」組み合わせを展覧。本展にはインターンシップとして、瓜生山学園 京都芸術大学の学生4名が参画し、広報や関連企画の運営補助等を体験した。[会場:京都芸術センター ギャラリー北・南他／鑑賞者数:3,858名]

【関連企画】

トーク「小林椋×青柳菜摘」8月8日 トーク「小嶋晶×《食卓》出演者」8月11日
(黒田健太、斉藤綾子、藤田彩佳、澤田奈々、堀内恵、益田さち)
クロージングトーク 8月22日

広報物デザイン:平野拓也 インターン:片岡澄美礼、笠間真理愛、曾根原佳乃、米野稀美
企画:水野慎子(京都芸術センター)

小嶋晶 Kojima Aki

大阪生まれ。看護師として手術室や集中治療室で働いた後、芸術活動をスタート。2019年京都市立芸術大学大学院美術研究科 絵画専攻油画修了。近年の主な展覧会に、「transmit program 2020」(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、京都、2020)、「第23回岡本太郎現代芸術賞展」(川崎市岡本太郎美術館、神奈川、2020)などがある。「Kyoto Art for Tomorrow 2020-京都府新鋭選抜展-」で最優秀賞、「アートアワードトーキョー丸の内2019」でグランプリを受賞。

小林椋 Kobayashi Muku

1992年東京都生まれ。2017年多摩美術大学大学院情報デザイン領域修了。2019年京都市立芸術大学大学院美術研究科 彫刻専攻修了。近年の主な展覧会に、「ネを見に峰に目をね」(TAKU SOMETANI GALLERY、東京、2020)、「ART CONTAINER」(GINZA SIX、東京、2020)、「州ん」(ギャラリー N、愛知、2020)、「ソテツとてつもなく並」(ギャラリー 16、京都、2019)などがある。

FOCUS#3 マヤ・ワタナベ『停滞』

Maya Watanabe “Suspended States”

2021年11月20日－2022年1月10日 12/26-1/4は休館 / November 20, 2021–January 10, 2022 *closed on 12.26 to 01.4

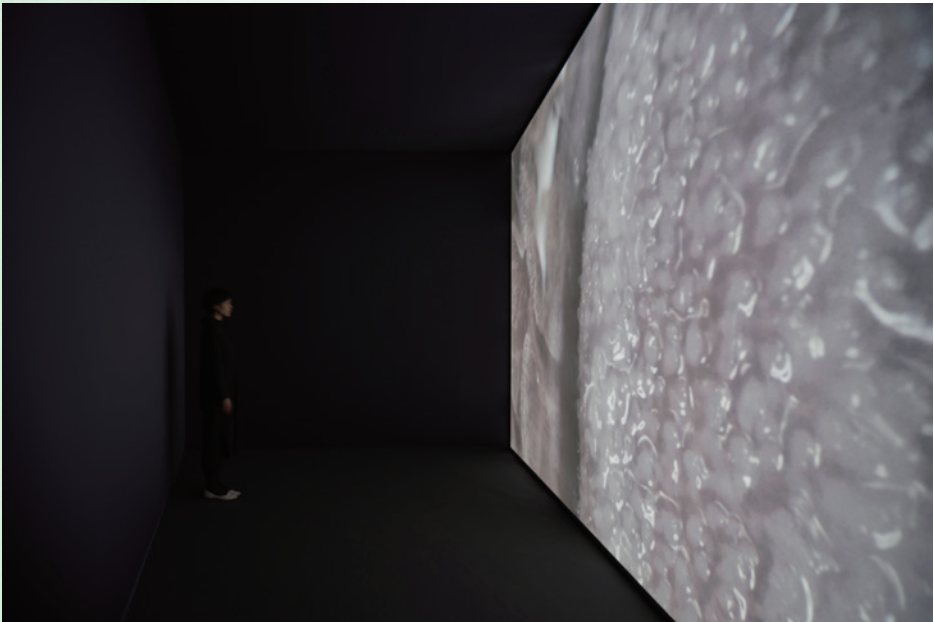


Photo by Gu Kenryou

アーティストとして経験や実績を積み重ねてきた中堅アーティストを個展形式でとりあげる「FOCUS」シリーズの3回目として、映像作家のマヤ・ワタナベを取り上げた。2016年に「SESC_videobrasil」で京都芸術センター賞を受賞したことによる副賞として、2017年の2ヶ月間、京都芸術センターのアーティスト・イン・レジデンスプログラムに参加した際に制作された作品《Earthquakes (崩壊)》と《Stasis (停滞)》とで構成。[会場:京都芸術センター ギャラリー北・南／鑑賞者数:2,662名]

企画:勝治真美(京都芸術センター)

マヤ・ワタナベ Maya Wataneba

リマ(ペルー)出身、アムステルダム(オランダ)在住。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ博士課程在籍。映像インスタレーション作品を主に制作し、人間あるいは人間以外の生物における生と死を微視的視点と巨視的視点を交差させながら見つめる。近年は出身国であるペルーの紛争から暴力の歴史と痕跡をあらわにする作品も手掛けている。これまでにデ・ボン美術館(オランダ)、国立21世紀美術館(イタリア)、リマ美術館(ペルー)、パレ・ド・トーキョー(フランス)等で展覧会を開催するほか、SESC_videobrasil(ブラジル)、第13回ハバナ・ビエンナーレ(キューバ)、アジア・アート・ビエンナーレ(台湾)、北京ビエンナーレ(中国)などの国際的なフェスティバルにも参加。

SYNCHRONICITY

SYNCHRONICITY

2022年3月13日－4月24日

March 13–April 24, 2022

2021年、フランス政府の国外文化施設であるヴィラ九条山は開館30周年を迎えた。30年を機に、ヴィラ九条山でのレジデンスを行った400名のアーティストの作品の中から、10年ごとの区切りで3名のキュレーターが作品を選出し、京都芸術センターのギャラリーとヴィラ九条山の2会場で展覧会を同時開催した。[鑑賞者数:2,661名]

参加キュレーター・出展作家

90' (1992–2001)

キュレーター:伊藤由紀子

アーティスト: アンジェ・レッチア (Ange Leccia)、ドミニック・バスクワリーニ (Dominique Pasqualini / Information Fiction Publicité)、ジャン＝リュック・ヴィルムート (Jean-Luc Vilmouth)
会場:ヴィラ九条山

00' (2002–2011)

キュレーター:大坂紘一郎

アーティスト:ピエール・ヴァンクレール (Pierre Vinclair)
音響:クリコー・クーシアン (Krikor Kouchian)
会場:京都芸術センター ギャラリー南

10' (2012–2021)

キュレーター:天田万里奈

アーティスト:フェリペ・リボン (Felipe Ribon) & 関口涼子
会場:京都芸術センター ギャラリー北

主催: ヴィラ九条山、京都芸術センター (公益財団法人京都市芸術文化協会)

助成:笹川日仏財団、アンスティチュ・フランセ



Photo by Maetani Kai



Photo by manami tanaka

distance:人それぞれの楽しい鑑賞距離

distance:Enjoyable viewing distance for each person

2021年11月6日・7日 (ワークショップ)

11月22日－24日 (リハーサル・ショーイング)

November 6・7, 2021 (Workshop)

November 22–24, 2021 (Rehearsal and Showing)

若手の芸術家が大きく成長して飛び立とうとするその前に、最前線の情報に触れる機会を提供する「跳ぶ前に聞け!」プログラム。コロナ禍で一気に普及した「舞台のオンライン配信」について取り上げ、気鋭の振付家・映像作家のNishi Junnosukeと参加者がともに実験を重ね、現場・オンラインの両方で鑑賞できるパフォーマンスを制作発表した。[会場: 京都芸術センター 講堂/鑑賞者数:28名]

ゲストダンサー:奥野美和、敷地理、川村美紀子

ゲストテクニカルスタッフ:渡辺佳奈

[関連企画]

オンライントーク「オンラインで舞台監督が考えていること」 1月24日
登壇:イトウユウヤ (テクニカルスタッフ)、北方こだち (舞台監督/ THEATRE E9 KYOTOスタッフ/京都舞台芸術協会副理事長)、十河陽平 (京都芸術センターテクニカルマネージャー /RYU (参加者数:12名)

文化庁「ARTS For the Future!」補助対象事業

Nishi Junnosuke

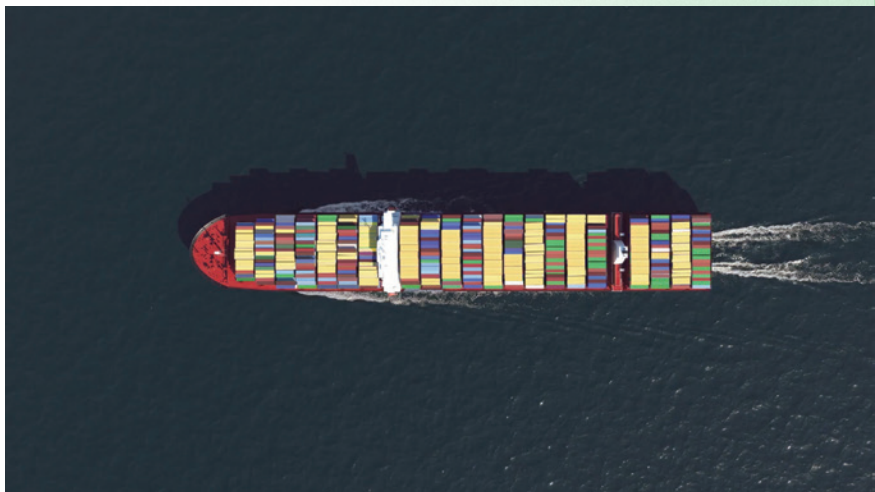
振付家、映像作家。1993年鹿児島生まれ。京都造形芸術大学映画学科を卒業後、舞台分野で活動するアーティストとコラボし、ドキュメント映像を制作するなど、記録の保存・復元・共有について研究。Yokohama Dance Collection 2019 competition2にて振付家デビュー。坂本善三美術館やいわき芸術文化交流館アリオスなどの「まっつーポス」企画において映像作家としてコラボレーション。ルーマニア・ドイツ4都市ツアーにも同行する。現在は京都を拠点に形式にとらわれないトリックスターのアイデアを用いて活動の幅を広げる。

クリスティーナ・ルカス 映像展『次の世界へ ~Vers l'autre Monde』

Cristina Lucas Exhibition “Vers l'autre Monde”

2021年10月1日～10月10日 / October 1～October 10, 2021

都市の姉妹都市であるバリ市発祥のニュー・ブランシュ（白夜祭）に着想を得た現代アートの祭典「ニュー・ブランシュ KYOTO」。2021年は「HORIZON」をテーマにバラエティ豊かなプログラムを京都市内各所で実施。京都芸術センターでは、映像、パフォーマンス、絵画、インスタレーションなどの様々な表現方法を用いて、現状の社会構造に対する独自の目線から作品制作を行ってきたクリスティーナ・ルカスの《La Liberté raisonnée》と《The People That Is Missing (El Pueblo Que Falta)》の2つの映像作品を紹介。会期中にはオンラインで繋いだトークイベントも実施した。[会場:京都芸術センター フリースペース、講堂／鑑賞者数:616名]



Courtesy Galeria Albarran Bourdais, Madrid

クリスティーナ・ルカス Cristina Lucas

スペイン生まれの現代美術アーティスト。バルセロナのピカソ美術館やルクセンブルクのジャン大公近代美術館（MUDAM）など、多くのギャラリーや美術館で作品が注目されている。映像、パフォーマンス、絵画、インスタレーションなどの様々な表現方法を用いて制作される作品群では、政治や経済に立脚した既存の社会機構を解体し、固定された視点から語られる歴史や現実性、集合的記憶に新たな可能性を投げかける視点を提供する。

KYOTO STEAM—世界文化交流祭—

KYOTO STEAM—International Arts × Science Festival

2021年10月12日～2021年2月13日 / October 12, 2021～February 13, 2022



Photo by Mugyuda Hyogo

2017年に始動したKYOTO STEAM—世界文化交流祭—は、アート×サイエンステクノロジーをテーマに、展覧会、コンテンポラリーダンスや伝統芸能の公演、あるいはワークショップやレクチャーなど、多様なプログラムを実施してきた。2021年度はその5年にわたるプロジェクトの最終年度として、アーティストと企業・研究機関のコラボレーション作品を展覧し、優れた作品を表彰する「KYOTO STEAM 2022 国際アートコンペティション」をコアプログラムに、京都市動物園を舞台にチンパンジーの研究者とアーティストが共同した「アート×サイエンス IN 京都市動物園 アートで感じる？チンパンジーの気持ち」や、KYOTO STEAMと最先端テクノロジーを用いた電子音楽とデジタルアートの祭典「MUTEK」を主催するMUTEK.JPが連携し、「平安京のサウンドスケープ」というテーマで、ライブ・パフォーマンスやトークイベントなどを実施する「NAQUYO—平安京の幻視宇宙—」を始めとする多様なプログラムを実施した。

[主なプログラム]

「アメノシタ・パビリオン」12月18日～12月26日、ロームシアター京都ロームスクエア

「アート×サイエンス IN 京都市動物園 アートで感じる？チンパンジーの気持ち」12月18日～12月26日、京都市動物園類人猿舎屋内観覧通路

HIXTO（ヒクト）「bug」12月24日～26日、京都市美術館別館2階

「OKAZAKI MARKET+」12月25日・26日、ロームシアター京都や岡崎公園など

「平安拾遺譚 cirque de kyoto」12月26日、平安神宮 神苑（尚美館）

「KYOTO STEAM 2022 国際アートコンペティション」2022年1月29日～2月13日、京都市京セラ美術館 新館 東山キューブ

制作支援事業

Artist-in-Studios 2021



Photo by Omote Nobutada

京都芸術センターでは、実験的な活動やさらなる発展を目指す芸術家の活動を支援するため、館内に設置した12の「制作室」を、劇団やダンスカンパニーや美術作家に無償で提供する制作支援事業を、開館以来継続的に実施している。2021年度は、2020年度中に実施した公募によって4月から9月まで使用する「第43期制作室使用者」として28の個人と団体が、2021年3月中に実施した公募によって10月から翌3月まで使用する「第44期制作室使用者」として32の個人と団体が採択となった。なお、制作室使用者には、制作室の使用期間中に市民が気軽に参加できる「明倫ワークショップ」と題したワークショップの開催を義務付けている。2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響により中断していたが、2022年1月より順次再開し、実技体験やレクチャーや公開稽古など、多様なワークショップが開催され、多くの市民が参加した。

2021年度 制作室使用者一覧（順不同）

【演劇】

シアターリミテ

劇団FAX

広田ゆうみ+二口大学

折面シアター

壁ノ花園

安住の地

このしたやみ

正直者の会

トイネスト・パーク

トリコ・A

笑の内閣

てんこもり堂

サファリ・P

ヨーロッパ企画

公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団
（ロームシアター京都）

まいや ゆりこ

MONO

ニットキャップシアター

BEBERICA theatre company

ルドルフ

劇団飛び道具

烏丸ストロークロック

駒優梨香

居留守

YOU-PROJECT

劇団そばえ

下鴨車窓

ルサンチカ

キノG-7

【ダンス】

余越保子

目黒大路

Monochrome Circus

一般社団法人 ANTIBODIES Collective

akakilike

ayami yasuyho

Monochrome Circus

男肉du Soleil

ダンスカンパニー KIKIKIKIKIKI

セレノグラフィカ

はなもとゆか×マツキモエ

【美術】

ベリー真紀子

神谷徹

渡邊野子

鍋木麻美（宙宙）

遠山由美

三原総一郎

城下浩伺

畠中光享

IDEAKEI

【音楽】

京都フィロムジカ管弦楽団

絃楽合奏団B-one

Co-program 2021

Co-program 2021

異なるパラダイムの触発・融合・溶解の中から、新しく挑戦的な芸術文化を創造することを目指す京都芸術センターは、その目的を達成するため、アーティストとの連携を強化して創作・発表の幅をさらに広げるべく、Co-programを実施している。2021年度は、2020年度に4つのカテゴリーを設け、実施した公募に応募された67件のプランの中から審査によって選出した22件の事業を実施した。

【募集枠】

カテゴリー A「共同制作」（公演事業）

アウトプットやクリエイションの方法も含め、京都芸術センターと協働し実現を目指す事業。京都芸術センターは、申請者とともに具体的な内容を協議し、企画・運営を行う。

カテゴリー B「共同開催」（展覧会事業）

アーティストやキュレーターによる展覧会プランを選び、京都芸術センターは申請者と協働し、展覧会の企画・運営を行う。

カテゴリー C「共同実験」（リサーチ、レクチャー、ワークショップ等）

京都芸術センターで実施することで大きな実績が期待できる事業のうち、京都、国内外の芸術・文化に対する意義を持つと判断されるものを採択。京都芸術センターと申請者で協議を重ね、企画内容をブラッシュアップし、実施。

カテゴリー D「KAC セレクション」

演劇、ダンス、音楽、伝統芸能の公演等で、京都芸術センターで実施することで大きな実績が期待できる事業。会場、機材、備品等の支援により実現可能と判断されるプランに対し、その発表を支援。

幻灯劇場『盲年』

Gentou Gekijou “Mounen”

2021年8月27日－8月29日 / August 27－August 29, 2021



Photo by Nakaya Toshiaki

京都を拠点に活動する演劇集団「幻灯劇場」は、2020年度の採択団体だったが、新型コロナウイルスの影響で延期を経ての上演となった。能「弱法師」を下敷きに、2019年に初演した『盲年』を京都・東京2都市ツアーで発表した。[会場:京都芸術センター 講堂／鑑賞者数:243名]

8月27日－29日
27日 19:00
28日 13:00/17:00
29日 15:00

作・演出:藤井颯太郎
出演:村上亮太郎、橋カレン、松本真依、鳩川七海、本城祐哉、谷風作、藤井颯太郎
衣装:杉山沙織 音響:三橋琢 映像:月原康智(ジョッガ)
美術:野村善文 照明:渡辺佳奈 舞台監督:浜村修司
宣伝美術:三牧広宣、橋カレン 宣伝撮影:松本真依
制作統括:谷風作 制作協力:黒澤たける、谷口祐

主催:幻灯劇場、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）
助成:芸術文化振興基金、独立行政法人日本芸術文化振興会

幻灯劇場 Gentou Gekijou

映像作家や俳優、ダンサー、写真家などジャンルを超えた作家が集まり、「折り」と「遊び」をテーマに創作をする演劇集団。2017年文化庁文化交流事業として大韓民国演劇祭へ招致され『56db』を製作、上演。韓国紙にて「息が止まる、沈黙のサーカス」と評され高い評価を得るなど、国内外で挑戦的な作品を発表し続けている。日本の演劇シーンで活躍する人材を育てることを目的に京都に新設された『U30支援プログラム』に採択され、2018年-2022年まで京都府立文化芸術会館などと協働しながら作品を発表。

はなもとゆか×マツキモエ『DAISY』

Hanamoto Yuka + Matsuki Moe “DAISY”

2021年11月18日－11月20日 / November 18－November 20, 2021



Photo by shinzi

京都を拠点に活動するコンテンポラリーダンスデュオの「はなもとゆか×マツキモエ」が、ワーク・イン・プログレス上演での観客からの反応やフィードバックをもとに、新作公演「DAISY」を発表した。[会場:京都芸術センター 講堂]

〈ワーク・イン・プログレス公演〉
2021年7月10日、11日（鑑賞者数:69名）

〈本公演〉
11月18日 19:00 19日 19:00 20日 15:00（鑑賞者数:134名）

演出構成:松木萌
振付:花本ゆか、松木萌
出演:花本ゆか、松木萌、黒田健太、増川建太
照明:池辺茜 照明オペレート:塩見結莉耶 音響:高田文尋
音楽協力:Public on the mountain 衣装協力:吉藤濯(izon)
舞台監督:浜村修司 PR映像:西垣匡基 記録写真:shinz
記録映像:駒優梨香 協力:ANTIBODIES Collective、
岩本さやか、海老澤美幸、河村都、小林勇陽、駒優梨香、
下野優希、菅一馬、武吉浩二、中井萌梨、福田有司、山田航大
制作:豊山佳美

主催:はなもとゆか×マツキモエ、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）

はなもとゆか×マツキモエ Hanamoto Yuka + Matsuki Moe

京都芸術大学映像・舞台芸術学科5期卒業のコンテンポラリーダンスデュオ。2008年結成。2009年コンドルズ振付コンペティション3位入賞。2011年大阪芸術創造館CONNECTvol.4にて最優秀賞を受賞、単独公演『ENJOY?』上演。2013年横浜ダンスコレクションEX2013に出場。アトリエ劇研創造カンパニーとして2015年『Okay?』、2016年『WORM HOLE』を発表。2019年には京都芸術センターにて『VENUS』上演。

劇団しようよ『セミヘブン』

Gekidan Shiyouyo “Semi-Heaven”

2021年12月17日－12月19日 / December 17－December 19, 2021



Photo by Wakita Tomo

「『セミヘブン（その世）』、それは「この世」と「あの世」の間にあるもの。人々がいのちをアップロードしてクラウド化する社会に、とある母子がいた。中年を迎えた息子を、年老いた母は忘れつつある」。劇団しようよの旗揚げ10周年を迎えた記念公演でもあった本作は、拠り所のない「この世」に捧げる「救済劇」として創作された。【会場:京都芸術センター 講堂／鑑賞者数:174名】

12月17日 18:00 12月18日 12:00/16:00 12月19日 11:00/15:00

作・演出:大原渉平 出演:夏目慎也(東京デスロック)、西村花織(劇団しようよ/劇団飛び道具)、大柿友哉、南波圭(なんばしすたーず/青年団)、波多野伶奈、前田隆成(ハコボレ)
音楽・演奏:吉見拓也 舞台監督・舞台美術:脇田友(スピカ) 照明デザイン:吉田一弥
照明:木内ひろみ 音響:江口佳那 文芸:稲垣貴俊 フライヤーイラスト:森裕介
宣伝美術:大原渉平 制作:飯塚なな子 制作協力:吉岡ちひろ(劇団なかゆび)

主催:京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会)、劇団しようよ
助成:文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業
協力:一般社団法人フリンジシアターアソシエーション、KAIKA

劇団しようよ Gekidan Shiyouyo

2011年旗揚げ。「人間の存在感」をキーワードに、社会からこぼれ落ちてしまいそうな「弱さ」をヒントに、小さな感傷にフォーカスし、そこから観客の原風景にアクセスする作品を展開中。2015年「第6回せんがわ劇場演劇コンクール」(東京)でオーディエンス賞受賞。2015～2017年アトリエ劇研(京都)創造サポートカンパニー。2016年よりKAIKAアソシエイトカンパニーとして活動を行う。



桐月沙樹・むらたちひろ

『時を植えて between things, phenomena and acts』

Kirizuki Saki+Murata Chihiro “between things, phenomena and acts”

2021年4月17日－6月13日

※4/25 ～ 6/1は新型コロナウイルス感染症拡大のため休廊

April 17－June 13, 2021

*Closed on Apr. 25 to Jun. 1

due to expansion of COVID-19 infection.

版画をバックグラウンドに持つ桐月沙樹と染織のむらたちひろによる二人展。作品として育ち、結実するまでにアーティストが触れてきた時間や、作品がひらく時間へ意識を向けることをテーマとした。インスタレーションやパフォーマンスを通じて時間や素材のもつ動きと、アーティストの意図・行為との関係性について提示する南ギャラリーと、新作を紹介する北ギャラリーとで構成した。【会場:京都芸術センター ギャラリー北・南／鑑賞者数:1,693名】

【関連企画】パフォーマンス | むらたちひろ 4月17日

【関連展示】「SCRAP BOOK 2021.4.24－5.31」むらたちひろ
6月2日－6月13日(会場:京都芸術センター図書室)

主催:時を植えて実行委員会、京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会)

桐月沙樹 Kirizuki Saki

兵庫県生まれ。2009年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻領域卒業、2011年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻(版画)修了。近年の展覧会に、「京都府新鋭選抜展」(2021 京都文化博物館)、個展「7月あたりの桐月さん。」(2020 ギャラリー恵風/京都)、個展「凹凸に凸凹」-絵が始まる地点と重なる運動-」(2019 ギャラリー崇仁/京都)など。

むらたちひろ Murata Chihiro

京都府生まれ。2011年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程工芸専攻(染織)修了。近年の展覧会に、個展「すべてしるべ 2020 #01 時の容」(2020 オーエヤマ・アートサイト / 京都)、「京都府新鋭選抜展」(2019 京都文化博物館)、「染・清流展」(2019 染・清流館 / 京都)、個展「Internal works / 境界の渉り」(2018 Gallery PARC / 京都)など。



Photo by Yoshimoto Kazuki

原田裕規『Unreal Ecology』

Harada Yuki “Unreal Ecology”

2022年1月29日－2月27日 / January 29－February 27, 2022

日本語にするならば「人工的な環境／人工的な生態系」といった意味合いになる本展のタイトル「Unreal Ecology」は、生成的に作られた仮想空間から、現実世界の自然環境、現代文明の消費流通システムに至るまで幅広い対象を捉えながら、CG、映像、写真などの「イメージ」が独自の生態系をもち、それに対して私たちがもつべき倫理観とはどのようなものなのかを思考する展覧会となった。[会場:京都芸術センター ギャラリー北・南、和室「明倫」／鑑賞者数:1,452名]

【関連企画】

ギャラリーツアー 1月30日

トークイベント① 原田裕規、富井玲子（美術史家、ボンジャ現想主宰） 2月11日

トークイベント② 原田裕規、梅津庸一（美術家、パーブルーム主宰） 2月25日

企画:原田裕規、京都芸術センター

テクニカルコーディネート:蠶恒太郎 映像設営:小西小多郎

展示造作（ギャラリー北）:スーパーファクトリー株式会社

設営:蠶恒太郎、十河陽平、米村優人、村上美樹 デザイン:熊谷篤史

記録撮影:松見拓也、村松桂 協力:青木英侃、田中西茜、松澤久美子、渡辺真太郎

主催:Unreal Ecology、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）

助成:公益財団法人野村財団、公益財団法人小笠原敏晶記念財団

原田裕規 Harada Yuki

1989年生まれ。アーティスト。社会のなかで広く認知されている視覚文化をモチーフに、人間の身体・認知・感情的な限界に挑みながら、現代における「風景」が立ち上がるビューポイントを模索している。クリスチャン・ラッセン、心霊写真、3DCGなどに着目しながら、実写映像、パフォーマンス、絵画、CGI、キュレーション、書籍など、多岐にわたる表現活動を行っている。主な個展に「アベルト14 原田裕規 Waiting for」（金沢21世紀美術館、2021年）、主な書籍に『ラッセンとは何だったのか?』（フィルムアート社、2013年）など。2016年に東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了、文化庁新進芸術家海外研修制度研修員として2017年にニュージャージーに、2021年にハワイに滞在。



Photo by Matsumi Takuya

お寿司 鰯『言わしておけば
ーお寿司と見る言論空間ー』

Osushi Iwashi “Iwashite Okeba”

2021年4月6日－4月11日 / April 6－April 11, 2021



Photo by Matsumoto Narihiro

ワークショップ参加者という今まで話したことの無い相手と会話をするとき、どのような関係性が生まれ、場が立ち上がるのか。そのプロセスを記録し、脚本執筆に落とし込むことを目指した。[会場:京都芸術センター 制作室9]

「宇宙人は居るのか」4月6日

「社会変遷ー昔はOKだけれど現在はNGな事案に関してー」4月7日

「演劇表現と倫理観ー舞台上ならば、どこまでやってもいいのかー」4月8日

「多様性への理解ー多様性が謳われた「風潮」の前後の文脈とその起源を考えるー」4月9日

「桃太郎はなぜ鬼退治に行ったか」4月10日

「SNS炎上に関してー人の命を奪うまで増幅し、

化ける「一言」の浸透を考えるー」4月11日

公開リハーサル 6月30日

ワークショップ参加者数（延べ）:52名 公開リハーサル鑑賞者数:54名

主催:お寿司、京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）

お寿司 Osushi

2016年、舞台衣装作家の南野詩恵が立ち上げた舞台芸術団体。作・演出・衣装を南野が担当し、生地と文字を媒体として、演者の内外からアプローチを試みる。

松尾加奈・楊淳婷『作り手のための
インターバルー今なぜ“アートコレ
クティブ”なのかー』

Matsuo Kana + Yang Chunting “Interval for Creators – Why “Art Collective” Now?”

2021年11月6日 / November 6, 2021



「コレクティブ」、「集団創作」、「協働」といったキーワードの下にこれまでの経験や現地での見聞に基づいたゲストトークと参加者との対話型のワークショップを実施した。[会場:京都芸術センター フリースペース／参加者数:32名]

ゲスト:居原田遥（インディペンデントキュレーター）、矢野靖人（shelf代表、演出家）、ファシリテーター:中谷和代（演出家、ワークショップデザイナー）

主催:京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）、松尾加奈（学校法人瓜生山学園 京都芸術大学〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉2021年度「演劇におけるポリフォニー:集団創作のプロセスと作品の構造をめぐって」研究代表）、楊淳婷（東京藝術大学特任助教）

松尾加奈 Matsuo Kana

1993年東京生まれ。東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻修了。舞台芸術の稽古場における集団創作のあり方に主眼を置き、自らが現場に入ること、創作プロセスの記録を試みている。

楊淳婷 Yang Chunting

台湾台北市生まれ。国立政治大学（台湾）卒業。2019年に東京藝術大学で博士号取得。自身の経験から移住や移民、社会とアートの関係性に関心を抱き、博士課程ではアートプロジェクトの企画・運営に携わりながら、「多文化社会」「社会包摂とアート」をキーワードに研究・フィールドワークを行なった。

Co-program 2021 カテゴリー C

20/100『路線図作曲』 ワークショップ&パフォーマンス

20/100 “Rosenzu composition”
Workshop & Performance

2022年1月5日－1月10日 / January 5－January 10, 2022



床に路線図のように張り巡らされた線を、線路のように歩きながら、様々なルールに従って、色々なモノの音を出していくワークショップ。パフォーマンスでは参加者の作品と共に、アーティストによる路線図を使った作品も上演した。[会場:京都芸術センター フリースペース]

こども向けワークショップ 1月5日(参加者数:4名)
一般向けワークショップ 1月9日(参加者数:8名)
公演 路線図作曲によるパフォーマンス 1月10日(鑑賞者数:57名)
参加アーティスト:きたまり、京都 Orchest-Lab、サファリ・P、山内朋樹
主催:20/100、京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会)

20/100 Niju Hyaku

音楽ワークショップを企画・開発する団体として2020年12月に結成。メンバーの多様な経験を生かすことで、芸術と科学をつなぎ、教育の視点も取り入れつつ新たな表現の可能性を探る。(メンバー:上羽貴大、榎下達也、増田真結、村上理恵)

Co-program 2021 カテゴリー C

三原聡一郎 オンライン展覧会 『空白に満ちた世界』

Mihara Soichiro Online exhibition
“The World Filled with Blank”

2022年3月4日－3月21日(オンライン)/ March 4－Mach 21, 2022



Photo by Tonoduka Aoi

三原聡一郎は2011年3月11日を契機に、テクノロジーと社会の関係性を考察するために、『空白のプロジェクト/blank project』と題した4連作を発表してきた。オンラインの可能性を問う実験的な試みとして、4つのシリーズを複数の会場に設置し、オンライン上で鑑賞する無観客展示を行った。

[関連企画]
展覧会ガイドツアー 3月6日 3月11日に波に乗ろう 3月11日

ブラウジングシステム:渡邊朋也 ストリーミングシステム:斉田一樹
企画制作:津嘉山裕美

主催:三原聡一郎、京都芸術センター(公益財団法人京都市芸術文化協会)
共催:國學院大學文学部松谷研究室、縁側の家
助成:小笠原敏晶記念財団、EU-japan fest

三原聡一郎 Mihara Soichiro

1980年東京生まれ、京都府在住。2004年多摩美術大学情報デザイン学科卒業、2006年情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]修了。山口情報芸術センター InterLab勤務を経て作家活動を本格化させる。世界に対して開かれたシステムを提示し、音、泡、放射線、虹、微生物、苔、気流、土そして電子など、物質や現象の「芸術」への読みかえを試みている。

Co-program 2021 カテゴリー D

凡例:公演名、公演日、鑑賞者数(主催者)

チチカカコ『「ともしび」ダンス公演』
2021年7月3日－7月4日 176名(チチカカコ)

SMILE vol.1『SMILE』
2021年8月19日－8月22日 100名(SMILE)

伏木啓『The Other Side – Sep.2021』(2020年度採択事業)
2021年9月10日－9月12日 227名(京都芸術センター、伏木啓)

倉田翠×鮎屋法水 京都発表会
『三重県新市区東九条ビリーアイリッシュ温泉口 徒歩5分』
2021年9月18日－9月19日 281名(株式会社precog)

ÜMM企画『[へ]いおり展』
2021年9月30日 98名(ÜMM)

y/n『カミングアウトレッスン』
2021年10月15日－10月17日 80名(y/n)

辻本佳『渠』
2021年11月26日－11月28日 128名(つじもとけい)

NPO劇研『老いをめぐるシアタープロジェクト』(2020年度採択事業)
パネル展示/ 11月30日－12月25日 シンポジウム/ 2021年12月4日
演劇公演/ 2021年12月24日－25日 175名(特定非営利活動法人劇研)

劇団なかゆび Nakayubi.-13『京の園』
2022年1月13日－1月16日 144名(劇団なかゆび)

地点×空間現代『ギャンブラー』
2022年1月19日－1月22日 256名(合同会社地点)

mimacul『さよならあかるい尾髭骨』
2022年1月28日－1月30日 66名(mimacul)

安住の地『¡play!』
2022年2月17日－2月20日(安住の地) ※中止

KIKIKIKIKIKI『棲家』
2022年3月5日－3月6日 156名(ダンスカンパニー KIKIKIKIKIKI)



ÜMM企画『[へ]いおり展』



辻本佳『渠』 Photo by Kim Sajik

創作に専念できるスタジオ（制作室）を京都芸術センターが、舞台設備・技術の備わった劇場の提供をロームシアター京都が行うことで、舞台機構の活用や、客席数や作品規模の拡大等に挑戦する若手アーティストを支援するプログラム。

福井裕孝『デスクトップ・シアター』

Fukui Hirotaka “Desktop Theater”

2021年7月2日－7月4日 / July 2－July 4, 2021



舞台や客席の足場として使用されている劇場のマテリアルを用いて「劇場」をテーブル化。劇場からテーブル、テーブルから劇場へ。異なる二つのスケールを往還しながら、人とものが共同する新たな舞台のかたちを追究した。〔会場：ロームシアター京都 ノースホール／鑑賞者数：205名〕

福井裕孝 Fukui Hirotaka

1996年京都府生まれ。人・もの・空間の関係を演劇的な技法を用いて再編し、その場の状況を異なる複数のスケールやパースペクティブから捉え直す。近年は、天井・周壁・床面によって仕切られた「部屋」という空間単位との関わりのなかで作品を制作する。主な演出作品に『インテリア』（2018,2020）、『マルチルーム』（2019）、『シアター・マテリアル』（2020）など。

敷地理『Hyper Ambient Club』

Shikichi Osamu “Hyper Ambient Club”

2022年度へ延期 / postponed until 2022

敷地理 Shikichi Osamu

振付家／ダンサー。身体をメディアとして、強い現実感を生むことを主題に作品制作を行う。主な作品発表に『happy ice-cream』（横浜ダンスコレクション2020）、『shivering mass, loose boundary』（TPAM2020フリンジ）、『blooming dots』（豊岡演劇祭2020フリンジ／CAF賞2020／TPAM2021フリンジ）、『Juicy』（横浜ダンスコレクション2021）など。主な受賞に「横浜ダンスコレクション2020」若手振付家のための在日フランス大使館賞など。

情報センター事業

京都芸術センターのこれまでの活動資料や文化芸術に関する書籍等を広く収集し公開している図書室や、全国の文化施設で行われる展覧会や公演などの情報を紹介する情報コーナーを設け、情報の発信を行っています。また、オンライン上では、京都芸術センターで行われる事業の情報を掲載するホームページのほか、京都市における文化芸術に関する情報を掲載する「KYOTO ART BOX」を運営しています。「KYOTO ART BOX」は2021年度にリニューアルし、有識者によるコラムやアーティストに対する支援情報など、様々な情報を発信しています。



図書室

京都芸術センター事業アーカイブの保存・公開や、芸術・文化に関する資料の収集。一部を公開しています。

利用者数:2,867名



情報コーナー

京都市内、また全国の美術館、ギャラリー、劇場などからのチラシ、ポスターなどを収集、配架しています。



京都芸術センター通信（明倫art）

京都芸術センターで行われるイベント情報のほか、開催したイベントのレビュー、発表を控えた創作中のアーティストのエッセイなどを掲載しました。また、今年度よりメールでイベント情報を届けるメールニュースの発行も開始しました。

発行部数:8,000部



京都芸術センターウェブサイト <https://www.kac.or.jp/>

京都芸術センターのイベントや公募情報を発信するウェブサイトを運営しています。また、情報発信のためのコミュニケーションツールとして、Facebook、Twitter、Instagramを活用しています。

ページビュー数:363,743回

Facebook
<https://www.facebook.com/kyotoartcenter/>



Twitter
https://twitter.com/Kyoto_artcenter



Instagram
<https://www.instagram.com/kyotoartcenter/>



KYOTO ART BOX <https://kyoto-artbox.jp/>

京都市における文化や芸術に関するイベントを掲載するウェブサイト「KYOTO ART BOX」をリニューアルしました。「ヒストリー」や「ノウハウ・テクニク」など、必要なときにライブラリーとして読み返すことができる情報や、アーティストに対する支援情報をまとめた「サポート情報掲示板」などのコンテンツを盛り込んでいます。

ページビュー数:142,935回

〔主な公開記事〕
ヒストリー

〔イントロダクション〕「危機を越えて…」大田垣 實

〔美術館と第二次世界大戦〕「戦中戦後の京都市美術館」中谷 至宏

〔ダムタイプ|仲間と喪失〕「90年代 京都にて」小山田 徹

〔文化財の救出と修復|阪神・淡路大震災〕「文化財レスキュー隊」田中 善明

アーティスト・コラム

LUCA_column 1「私的星の巡礼 カミーノ・デ・サンティアゴ」

LUCA_column 2「お守り」

LUCA_column 3「一年の終わりに」





交流センター機能

京都芸術センターは、当センターが主体となり各種事業を企画運営したり、情報を発信したりするのみならず、アーティストと市民、あるいはアーティスト同士の交流を促進するためのプラットフォームとなることを目指しています。2000年の開設以来続いているアーティスト・イン・レジデンス事業は、その最たるものであるでしょう。その他、京都芸術センターの活動を様々な局面で支えてくださる市民ボランティアの活動や、文化芸術を専門的な立場から支える方たちが作る京都文化芸術コアネットワーク(KACN)など、様々な立場の人が行き交い、触発しあう場を作っています。

公募プログラム ビジュアル・アート部門:Pa.LaC.E

Open Call Program for Visual Art:Pa.LaC.E

2022年2月10日－3月31日（オンライン） / February 10－March 31, 2022 (Online)



バジェ・メディナとベンジャミン・レイノルズによるユニットPa.LaC.Eは、2021年度の公募プログラムに採択され、来日して滞在制作を行う予定だった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大による渡航制限により渡航が叶わなかったため、オンラインで遠隔で現地を繋ぎながら映像制作に取り組んだ。建物とそこにまつわる人々の生活や身振りに興味を持つPa.LaC.Eは、引っ越し会社の仕事や地鎮祭のあり方などをリサーチし、サカイ引越センターの協力を得て、研修棟での研修の様子を撮影した。

助成:令和3年度文化庁アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業
協力:株式会社サカイ引越センター

パレス Pa.LaC.E

共に建築のバックグラウンドを持つバジェ・メディナ (Valle Medina) とベンジャミン・レイノルズ (Benjamin Reynolds) によるユニット。様々なメディアを組み合わせる彼らのプロジェクトは、空間への興味に立脚し、広大なアプローチにより建築的視点でコンセプトを展開する。彼らの作品は、ヴァン・アベム美術館 (アイントハーフェン)、Basis voor Actuele Kunst (ユトレヒト)、Centre de Cultura Contemporània (バルセロナ) などで展示されている。

オンライン・プログラム『WE AGE』

Online Program “WE AGE”

2022年1月10日－3月31日（オンライン） / January 10－March 31, 2022 (Online)



Photo by Osawa Itsuhiro



京都芸術センター 20周年のテーマでもあった「WE AGE」を引継ぎ、世代を超えた交流を生み出す場の創出を目指し、対象を世界に広げてオンラインのプログラムとして実施。オンラインで京都とアーティストの居住地を繋ぎ、対話やリモートでのリサーチを通して作品を制作したいと考える65歳以上のアーティストを募集した。チェコ、ロシア、アメリカ、イギリスから参加したアーティストはワークショップやインタビューなどを通して市民と交流をしながら各々の手法で作品を制作した。

助成:令和3年度文化庁アーティスト・イン・レジデンス活動支援事業
アシスタント・コーディネーター:パロンタン・ガブリエ

【採択アーティスト】

ニーナ・ビー Nina Bee

美術家、チェコ共和国在住。ニーナ・ビーの作品は、彼女の多文化な背景から大きな影響を受けており、まるで様々な場所や時間から届く混沌とした電報メッセージのようでもある。

リューボフ・クリック Lyubov Kulik

美術家、ロシア在住。手刺繍、壁面彫刻、ウッドペインティングまで、様々なメディアを用いて制作する。美術史への愛着と個人的な洞察からモチーフを得て、異なるオーナメントを一つのキャンバスに組み合わせる。

ポール・アラン・バーカー Paul Alan Barker

作曲家、英国在住。コンサートのほか、演劇、ミュージカル、オペラ、コンテンポラリーダンス、デジタルメディア等に作品を提供する。また、ピアニスト、指揮者、舞台演出や作家としても活躍する。

シャ・シャ・ヒグビー Sha Sha Higby

衣装作家、造形衣装パフォーマー、コスチューム・パフォーマンス・アーティスト。アメリカ在住。特に漆と影絵芝居に影響を受け、自身の活動に取り入れる。それらの技術を用いた衣装制作とパフォーマンスによって独自のスタイルを築いている。

アーティスト・イン・レジデンスプログラム・イン・パリ

Artist in Residence Program in Paris

2021年10月9日－2022年1月4日（梶原瑞生）、2022年1月9日－4月4日（松延総司）

October 9, 2021–January 4, 2022 for Kajihara Mizuki, January 9–April 4, 2022 for Matsunobe Soshi



梶原瑞生オープンスタジオの様子



松延総司オープンスタジオの様子

ヴィラ九条山、おおさか創造千島財団と連携し、世界最大規模のアーティスト・イン・レジデンス施設であるシテ・アンテルナショナル・デ・ザール (Cité internationale des arts、パリ)へアーティストや研究者を派遣するプログラム。新型コロナウイルス感染症拡大の影響による1年の延期を経て、梶原瑞生と松延総司がバリエーションで滞在制作を実施しました。

主催:京都芸術センター、おおさか創造千島財団、ヴィラ九条山、アンスティチュ・フランセ、シテ・アンテルナショナル・デ・ザール

梶原瑞生 Kajihara Mizuki

主に西洋のクラシック音楽を題材にし、正確に組み立てられた楽譜を身体的経験によって破壊・再構成するという試みを通して作品を制作している。記号を新しい情報に置き換えることへの関心から出発し、音楽を通して現代と古典を繋ぐことで、現代アートの新しい可能性を探る。

松延総司 Matsunobe Soshi

穴（0次元の点）や裂目（1次元の線）のような、凹み、影、虚無、空白を表す概念を形あるものとして2次元、3次元の空間に表出させる試みをベースとして制作活動を行う。近年は壁紙を使ったインスタレーションや街中に石を置くプロジェクト、野外彫刻作品などを通して、サイトスペシフィックな側面を追求する。



明倫レコード倶楽部

Meirin Record Club

作家のいいしんじを講師に迎え、各回テーマを設けて、いしいが持つ貴重なコレクションの中から選ばれた楽曲を、軽快な解説と共に蓄音機で紹介。蓄音機はハンドルを回すことで音が出るため、現代の私たちの生活では珍しく電気を使わない。人が集まる機会の減った今、空気が震える温かみのある音を体感し、共有するひとときを提供した。〔会場:京都芸術センター 講堂〕

〔各回のテーマ〕

其ノ75:6月12日「犬」の音楽（鑑賞者数:30名）

其ノ76:11月3日「馬」の音楽（鑑賞者数:45名）

其ノ77:2022年3月21日「鳥」の音楽（鑑賞者数:64名）

明倫ワークショップ

Meirin Workshop

制作室の利用者が市民に向けてワークショップを実施。劇団が制作中の作品の公開稽古を行ったり、コンテンポラリーダンスのカンパニーが参加者とともに新しいダンスを創作したり、美術作家がオープンアトリエを行うなど、制作室利用者の個性や関心に合わせて多様なワークショップを、年間を通じて開催している。

ボランティアスタッフ

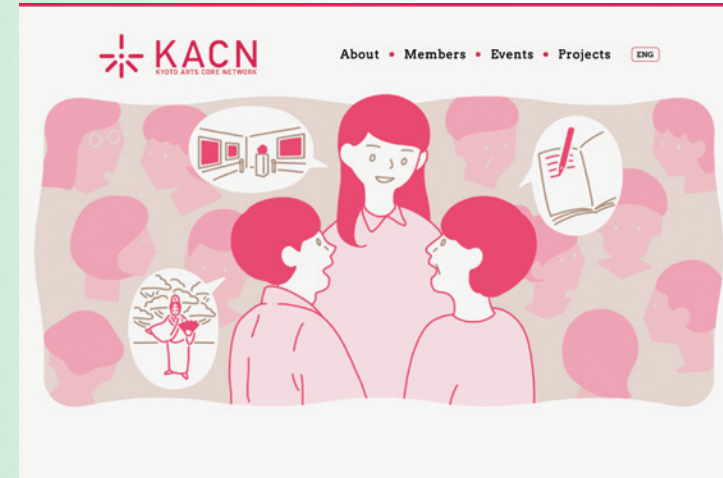
Activities of volunteer staff



京都芸術センターの活動を支えするとともに、京都芸術センターで事業を行うアーティストとの交流やボランティアスタッフ同士の交流を通して、京都芸術センターや地域社会を活性化することを目的に、200名弱のボランティアスタッフが、日々様々な活動を行っている。展覧会の監視、公演の受付、作品制作補助、図書室の運営のほかにも、ボランティアスタッフ有志による自主的な活動として、勉強会やサークル活動なども実施している。

京都文化芸術コア・ネットワーク

KYOTO ARTS CORE NETWORK



2013年7月に京都市の呼びかけにより設立。京都において文化芸術を支える専門的活動を行う方たちの情報交流のハブとなること。多種・多様な情報を収集、編集、発信することに資するプラットフォームを提供すること。また京都の創造環境を洗練させ、世界的な文化芸術都市・京都を創生すること。これらを目指し、京都芸術センター内に事務局を置き、活動を行っている。

【メンバー】

舞台制作者、キュレーター、ギャラリスト、デザイナー、研究者、編集者等、ジャンルを横断した多様な人材が登録している。

【活動内容】

総会:年1回、前年度の報告、進行中プロジェクトの討議等を実施。

例会:年2～3回、レクチャーや交流会などを実施。

その他、メンバーからの提案された企画を実施する。

京都文化芸術コア・ネットワーク

<http://kyoto-arts-core-network.org/>



【受託事業】京都市文化芸術総合相談窓口

THE KYOTO-CITY ARTS AND CULTURE COUSELING OFFICE



ウィズコロナ社会における活動支援や活動再開に関する支援策の情報発信と相談に総合的に対応する機能を持った「京都市文化芸術総合相談窓口（愛称KACCO／カッコ）」を京都芸術センター情報コーナー内に2020年度より開設。「活動を再開していきたいけれど、どのように進めていくか悩んでいる」、「公演やイベントがキャンセルになり収入が減ってしまった」、「支援を受けたいが、どのような支援があるか知りたい」等、内容に応じた相談先の紹介や相談内容の整理等、時に関係機関や法律・会計の専門家と連携し、文化芸術関係者の相談に対応している。

【主な情報発信及び相談対応内容】

- ・活動再開に向けた支援情報（活動再開に関するアドバイス、講座・ワークショップに関する情報など）
- ・資金に関すること（国や自治体の支援制度、クラウドファンディングによる資金調達など）
- ・専門知識に関すること（オンライン配信に係る技術相談、契約書・著作権等の法律相談など）

【対象者】

京都市内在住又は市内に活動拠点のある文化芸術関係者
 (例:アーティスト、実演家、俳優、制作者、デザイナー、技術スタッフ、アートマネージャー、スペース運営者など)

京都市文化芸術総合相談窓口（KACCO／カッコ）
<https://sites.google.com/kyotoartsupport.com/kacco/>



Photo by Shimada Yoshitaka

【受託事業】京都市アーティスト・イン・レジデンス連携拠点事業

Kyoto City Artist in Residence Program



海外のアーティスト等を受け入れる環境の整備や、文化芸術の国際発信力を強化するため、全国のアーティスト・イン・レジデンス（AIR）施設等とのネットワークやウェブプラットフォームなどを活用し、関係機関・団体との連携を加速させ、国内外のAIRネットワークの中核を担うことを推進する事業を京都市から受託し、実施した。

【2021年度の取り組み】

情報集約・発信

日本全国のアーティスト・イン・レジデンス総合サイト「AIR_J」の管理・運営を担った。
 掲載団体・施設数:76

AIRに関する調査研究及びそれらのアーカイビング

主な公開記事:「AIR on air オンラインシンポジウム - パンデミック下におけるアーティスト・イン・レジデンス レポート」、レポート:AIRラウンドテーブル「IN AND OUT OF THE SCENE - アーティスト・イン・レジデンス」、レポート:文化庁令和3年度アーティスト・イン・レジデンスシンポジウム、「アーティスト・イン・レジデンスができる、京都の個性的アートホテル」

ネットワーク構築・相談事業

ウェブサイト上に相談窓口を開設し、アーティストやAIR運営者からの相談を受け付けたほか（相談件数:58件）、各地のAIR運営者が参加するネットワークミーティングを開催し、コロナ禍、コロナ後のAIRのあり方について意見交換を行った。

ネットワークミーティング「AIRs Dialogue」2月5日

登壇:小田井真美、梶原瑞生、勝治真美、菅野幸子、慶野結香、杉山道夫、田村友一郎、東海林慎太郎、日沼禎子
 参加者数:84名

【連携事業】

「文化庁 令和3年度アーティスト・イン・レジデンスシンポジウム」11月4日
 登壇:山出淳也、赤井あずみ、小田井真美、服部浩之
 主催:文化庁
 共催:京都市、運営事務局:京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）
 広報協力:AIR Network Japan
 参加者数:115名（内現地参加者19名）

AIR_J 日本全国のアーティスト・イン・レジデンス総合サイト
<https://air-j.info/>



京都芸術センター運営体制（2021年度）

館長	建畠哲
事務局長	井上俊彦
総務課長	林光地
チーフプログラムディレクター	山本麻友美（～ 2021年5月）
プログラムディレクター	勝冶真美、萩原麗子、佐野晶子（2021年7月～）、谷竜一（2021年7月～）
アートコーディネーター	遠山きなり（～2021年9月）、水野慎子（～2021年9月）、加藤雅俊（～ 2021年6月）、箕浦慧、八木志菜、吉峰拡、瀬藤朋（2021年10月～）
事業課長	竹内香織
職員	江藤恵子、荒木良子、加藤果菜子、草木マリ、瓜生祐子、藤村南帆
テクニカルスタッフ	十河陽平（株式会社RYU）、齧恒太郎、西田範次、村上美樹、米村優人

【運営委員会】

委員長	田中誠二（大和学園理事長）
委員	稲賀繁美（京都精華大学国際文化学部教授）、柿沼敏江（京都市立芸術大学名誉教授） 砂川敬（文化市民局文化芸術都市推進室長）、平芳幸浩（京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授） 広瀬依子（追手門学院大学国際教養学部国際日本学科講師） 森山直人（京都造形芸術大学教授・舞台芸術研究センター主任研究員） 山本麻友美（KYOTO STEAMー世界文化交流祭ー実行委員会アートディレクター）

【公益財団法人京都市芸術文化協会】

理事長	近藤誠一
副理事長	村山明
専務理事	中谷香

【外部委員】

アドバイザー	千宗室（元館長・裏千家家元）
アドバイザーーボード委員	井上八千代（京舞井上流家元）、太田耕人（京都教育大学学長・演劇評論家）、太田垣實（美術評論家） 久保田敏子（元京都市立芸術大学伝統音楽研究センター所長）、森口邦彦（染色家・重要無形文化財保持者）
アーツアドバイザー	山本麻友美（KYOTO STEAMー世界文化交流祭ー実行委員会アートディレクター）

京都芸術センター 2021年度事業報告書	発行日	2022年6月
	発行元	京都芸術センター 〒604-8156 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2 TEL:075-213-1000 FAX:075-213-1004
	編集	勝冶真美、安河内宏法（京都芸術センター）
	デザイン	下元善光（EIGHTY ONE Inc.）
	印刷	有限会社修美社